

Title	<書評> Roger Frie, "Subjectivity and Intersubjectivity in Modern Philosophy and Psychoanalysis : A Study of Sartre, Binswanger, Lacan, and Habermas", ROWMAN & LITTLEFIELD PUBLISHERS, INC., 1997
Author(s)	大黒, 温俊
Citation	年報人間科学. 2012, 33, p. 121-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11232
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Roger Frie***Subjectivity and Intersubjectivity in Modern Philosophy and Psychoanalysis:
A Study of Sartre, Binswanger, Lacan, and Habermas***

ROWMAN & LITTLEFIELD PUBLISHERS, INC., 1997

大黒 温俊

はじめに

ロジャー・フリーは、ケンブリッジ大学で哲学の博士号を取得し、その後ジョージワシントン大学で臨床心理学の博士号を取得、現在はカナダのサイモンフレイザー大学の教育学部で准教授職に就いている。教育心理学における自己性や人間性といった概念に関心を持ち、現象学、解釈学、ポストモダニズム、社会理論、そして精神分析など、様々な学問を駆使したアプローチを試みている。最近では発達過程、治療過程における文化的アイデンティティの役割に関する研究を行っている。

本著は、四人の哲学者—サルトル、ビンズワンガー、ラカン、ハーバーマス—に焦点を当てながら、現代哲学と精神分析がその歴史において主観性と間主観性をどのように扱ってきたか、その系譜を探る思想的著作である。意識経験を脳の働きとしてみ説明しようとする還元主義的態度や、言語以前の主観性の水準を否定するウィトゲンシュタイン以降の哲学、あるいはポストモダニズム的な主観性の脱構築に対して、そこから零れ落ちてしまう、主観性、間主観性の水準こそが言語や人間存在の存立に重要な役割を果たしているのだと、フリーは繰り返し強調する。そうした意図から注目されるのが、サルトルとビンズワンガーである。サルトルとビンズワンガーは、主観性の哲学、間主観性の哲学のそれぞれのキーパーソンとして位置づけられ、両者の間の共通点、あるいは対立点は、現代においてラカンとハーバーマスの関係に引き継がれている、このような思想史的な読解が本書の筋になっている。

フリーがサルトルを評価するのは以下の点においてである。サルトルは、すべての反省に先立ち、かつそれを可能にする「前反省的な自己意識」、あるいは「自己自身に親しんでいること」という発想を概念化した。これはポストモダニストからの主観中心主義批判をうまくかわすのみならず、言語や人間存在を理解する上で、主観性の検討が避けて通れないことを示すものとなっているのである。

しかし、サルトルは、他者との関係を主と奴の闘争関係として理解しており、そこに互恵的な対人関係という発想は入り込む余地がない。そこでは自己実現の可能性は個人的実存の如何にゆだねられているのである。サルトル、そしてハイデガーに顕著なこのような独我論的傾向を批判し、我—汝の原初的な関係性を強調した哲学者として検討されるのがビンズワンガーである。

そして、サルトル、ビンズワンガー、両者の検討を通じ、最終的には、一般的に対立するものと考えら

れている、主観性の哲学と間主観性の哲学を宥和する仮説が提示される。

さて、本書の重要性の一つは、ビンズワンガーの未邦訳、未英訳の文献を多く扱い紹介している点にある。特に『人間的現存在の根本形式と認識“Grundformen und Erkenntnis menschlichen Daseins”（以下『根本形式』）』はビンズワンガーの理論的主著であるにもかかわらず、本邦においては未邦訳であるばかりか、紹介論文、言及論文も極めて少ない。本著は『根本形式』を中心にビンズワンガーの「愛の現象学」を解説しており、ここで紙幅を割いて紹介する価値は小さくないように思われる。本著のアウトラインや詳細については、当該テキストに当たっていただく事にし、本書評は「愛の現象学」を中心的に紹介する事とする。

1. 愛の現象学

ここからは第三章「ルートヴィヒ・ビンズワンガー：関係の優位」を中心に、ビンズワンガーの哲学、「愛の現象学」を、フリーの解釈に従って要約的に紹介したい。

よく知られているように、ビンズワンガーの『根本形式』は、ハイデガーの『存在と時間』への批判的検討を通じて生み出された著作である。『根本形式』は、『存在と時間』に内在する独我論的傾向、あるいは他者性軽視の傾向に対して異議を投げかけながら、我一人の間に築かれる「愛の双数的様式」こそが人間存在の最も原初的な様式だと主張する。周知の通り、ビンズワンガーのこうした「関係の優位」というモチーフは、ブーバー哲学から継承されたものであるが、フリーの解説もまた、ハイデガー、ブーバーとの影響関係を論じながらビンズワンガー哲学をあぶりだす、という形で進められる。

①「あいだ」から「われわれ性」へブーバー哲学のラディカル化

ビンズワンガーはブーバーの「あいだ」の概念をラディカルに読み替えた。ブーバーにおいては我と汝の出会いの場所に過ぎなかった「あいだ」は、ビンズワンガーにおいて「われわれ性 we-hood」として読みかえられる中で、存在論的な位置づけを与えられる。ビンズワンガーによると、われわれ性は、我と汝がはじめてそこで誕生する、人間の実存の原初の様態である。フリーはこの点をこう解説している、すなわち「ビンズワンガーは……われわれ性は、我一人の別々の実存に存在論的に先行する、と言っているのである。言い換えれば、われわれ性は……我と汝の出現の可能性の条件なのである」⁽¹⁾。このような、我にも汝にも還元することのできない、それらのあいだとしてのわれわれ性において取り結ばれる関係を、ビンズワンガーは「互恵的な愛の関係性 the reciprocal love relationship」、あるいは「愛の双数的様式 dual mode of love」と呼ぶのである。ビンズワンガーはわれわれ性を、我や汝といった個別的な実存がそこから構成される最も原初的な様式と考えており、後に見る人間存在の種々の存在様式もまた、そうしたわれわれ性の派生態として考えることができる。

このように、それ以上還元することのできない愛の双数性を理論的な原理として立て、そこから個別的な実存や、社会的役割関係と言った派生的な存在様態を説明していく、これがビンズワンガーの『根本形式』での戦略のようだ。後述するように、それ以上還元できない愛の双数的様式における存在をビンズワンガーは「世界超越存在」として概念化するのだが、この概念の独自性を理解するためにはもう一歩進み、ハイ

デガールのいう気遣い構造、あるいは孤立化した本来の実存といった概念といかなる対決があったかを見なければならぬ。フリーに従い、この点を追って見ていこう。

②複数性 plurality、単独性 singularity、愛の双数的様式—気遣い構造と愛の構造

ブーバーが我—汝関係と我—それ関係の弁証法的関係を指摘したように、ビンスワンガーもまた、愛の双数的様式とその他の存在様式との弁証法的関係を強調する。その他の存在様式とは、他者との日常的な相互関係における存在様式である「複数性」と、個人的実存の存在様式である「単独性」である。通常我われはこれらに双数的様式を加えた三つの存在様式の相互関係のうちに存在している。加えて、表：1にまとめたように、ハイデガールの気遣い構造との対比のうちに、愛の構造の射程を浮かび上がらせていることも重要である。

表：1

ビンスワンガー用語	ハイデガー用語	
Plurality	Being-with-others	} 気遣いの射程
Singularity	Individualized authentic Dasein	
Dual mode of love	*	} 愛の射程

ここでフリーが強調するのは、「人間的存在の起源と意味は、それ以上還元できない実存の双数性に根ざしている、とビンスワンガーが主張している」⁽²⁾ ことだ。つまり、双数的様式は残り二つの存在様式の起源であるという意味で、非常に重要な位置づけを与えられているのである。先のわれわれ性に関する記述と重ねて、双数的様式は他の存在様式の可能性の条件と考えられている、とすることができよう。

そして、気遣い構造と愛の構造の根本的な差異は、愛の双数的様式独自の時間的、空間的性格の記述において、世界内存在と世界超越存在の差異として、明白になる。最後にこの点を確認しておこう。

③世界超越存在

フリーが双数的愛における時間性、空間性の特徴的なものとして取りあげるのは、以下のような点である。時間論においては、我が汝と愛の関係を築くことで本来の可能性へと「到達」する「永遠の瞬間 eternal moment」が、空間論においては、互恵的な関係において他者のうちに見出される「我が家の感情 feeling of home」、あるいは、「エロスの統一 erotic union」において生じる「一者性の感覚 sense of oneness」が取り出され、こうした時間的空間的特徴を有するものとしての双数的な愛が、世界内存在の構造を超越することが説明される。フリーによると、「愛に満ちた出会いの経験、あるいは愛における存在は、新たな世界を開き、それはビンスワンガーの見解では、世界内存在としての自己気遣いの現存在の構造からは説明できないものである」⁽³⁾。つまり、現存在は愛の双数的様式において、ハイデガーが世界内存在として描き出した気遣い構造を超越するのである。そして、このような日常的な世界を超越した愛にお

ける存在を、ビンスワンガーは「世界超越存在 being-beyond-the-world(Über-die-Welt-hinaus-sein)」と呼ぶ。

2. 本著におけるビンスワンガーの位置づけ

最後に、本著においてビンスワンガーがいかなる位置づけを与えられているかを、ハーバーマスやラカンとの距離感などを絡めて見ておきたい。

①サルトル、ビンスワンガー、ラカン、ハーバーマス

ハーバーマスが理想的対話状況における討議を通じての普遍的合意へ到達する可能性を説いた一方で、ラカンは言語的領域（象徴界）を、主体が言語の裂開を経験する領域と考えた。そこで主体は欠如—満たされることのない欲望—を刻み込まれ、その欠如は討議的な意味によっては決して満足させられ得ない。つまり、ハーバーマスが言語的討議に調和の可能性を見いだした一方で、ラカンにおいて象徴界は精神的疎外の領域と考えられている。フリーはハーバーマスとラカンのこのような対立を、他者との互恵的な関係を理論に組み込んでいるか、あるいは他者との対話に自己実現の可能性を見出しているか、という点から、ビンスワンガーとサルトルの対立と重ね合わせている。

しかし、主観性は他者との出会いに先行するか否か、あるいは主観性と他者性のどちらに重点を置くか、といった二元論的な切り口に対してフリーは懐疑的である。そうした二元論的思考を乗り越えるべく提出されるのが、結論部で展開される仮説である。

②フリーの仮説—分離性 separateness と一体感 togetherness の解釈から—

一節で見たように、フリーはここまで、愛の性質をよく表すものとして、二者性（双数性）と一者性（統一性）の感覚を、特に区別することなくビンスワンガーから取り出している。しかし、フリーは続く個所で、両者の差異、および関係を、ビンスワンガーの分離性、一体感の解釈を通じて明らかにしており、この点はフリーによるビンスワンガー解釈の独自性、本著におけるビンスワンガーの位置づけを理解するうえで重要な箇所となっている。

ビンスワンガーによると、本来的自己実現は、間主観的な愛の経験において生じる分離性と一体感の弁証法を通じて達成される。ここで分離性は、他者との差異を相互に承認し、互いの主体的自律を保持すること、一体感とは他者との一者性を相互に承認し、それへの欲望を実現すること、と簡単に理解しておこう。愛においては、この二つの契機が同時生起し、弁証法的に絡み合いながら、自己実現の可能性を担保するのだが、フリーはこの点を理解するため、ビンスワンガーから以下の二点をポイントとして取り出す。

一つ目は、分離性という考えは自己性の経験を担保するものだが、しかし、それは一体感によって裏打ちされることで初めて可能になるという点。あるいは逆も然り、分離性は一体感の条件ともなっている。

二つ目は、分離性と一体感の弁証法的関係とは何か、という点に関わる。しかし、差異の相互承認＝分離性と一者性の相互承認＝一体感が、愛において同居することなど可能なのだろうか。両者は矛盾しあうものではないか。フリーは、この意見の代弁者としてサルトルを持ち出す。というのもサルトルにとって、

愛とは、他者が私へ服従し、かつ彼／彼女の自律性を維持しもするという、不可能な理念を押し付けるという点で、矛盾を内包するものだからだ。

しかし、ビンスワンガーは一見相矛盾する、「分離性と一体感のパラドキシカルな緊張」にこそ、愛と自己実現の可能性を見出す。ビンスワンガーは、この両者の緊張関係を指して「弁証法的」と呼んでいるのだが、フリーはこの弁証法をヘーゲルと比較しながら解説している。

フリーによると、ヘーゲルの弁証法においては、絶対的主観という唯一の単一体に、同一性と差異は止揚され、最終的にはすべての他者性は無効にされる。一方で、ビンスワンガーが愛の相互承認のうちに見たのは、分離性と一体感がどちらか一方に回収されてしまうことのないような、ダイナミックな相補的關係、弁証法である。分離性と一体感の弁証法的関係において、我と汝は我われとして存在しながら、同時に両者は別々の存在としての区別を保持する、言い換えれば、同一性と差異、一者性と他者性が緊張関係のうち共存するような領域が開かれ、そこにおいて本来的自己実現が可能になるのである。

先に、原著の最終的な目的は、主観性の哲学と間主観性の哲学を宥和する仮説を提唱することだと述べたが、フリーがビンスワンガーを評価するのは、そうした仮説の可能性を、愛における分離性と一体感の弁証法的関係に見出したからに他ならない。

フリーの提唱する仮説とは以下のようなものである。すなわち、お互いが相互の個人的自立性を維持すると同時に、一つのアイデンティティを共有しもするような愛の領域において、言い換えれば、分離性と一体感が互いを排除せぬ弁証法的な関係において、お互いの自己実現の可能性を担保する、そのような主観性と間主観性を宥和させる哲学が可能ではないか、とフリーは言うのである。単なる一者性への合一ではなく、自他関係を終わりなき闘争関係とみなすのでもなく、さらには互いの個人的自立性を排除するでもない、差異性と一者性の相互承認によって自己実現を成し遂げる可能性を、フリーは示そうとしている。

注

(1) R.Frie,1997,p93

(2) Ibid, p94

(3) Ibid,p97